

# 私のプロジェクト X



略歴  
1940年 札幌生まれ  
1965年 北海道大学 理学部地質学鉱物学科卒業  
1965年 北海道開発コンサルタント入社  
(現㈱ドーコン)  
1982年 ㈱構研エンジニアリング入社  
2003年 同上 代表取締役社長  
2003年 日本技術士会北海道支部 支部長

(社)日本技術士会北海道支部 顧問  
技術士(応用理学/総合技術監理部門)

大島 紀 房

## 「初志」は、はかなく消え去りし

— 小さい頃の夢は —

生まれは札幌で中島公園の近く。豊水小学校(すでに閉校)、中島中学校(現パークホテル)といわゆるススキノ地域で育った。



写真-1 豊水小学校の大典記念文庫  
(大正天皇の即位にちなんで名付けられた)

小学生低学年のころは体が弱かった。よく熱をだし、親におぶられ、医者にお世話になった。「医者はいんだな～、いつかは医者に!!」、小学生時代の作文である。

ところが高校になると、そんな高尚な考えはあっさりと消えさった。私の高校生時代は石原裕次郎が銀幕に登場した時代である。「風速40米(メートル)」の映画で、裕次郎が北大の建築学科の学生として活躍するストーリー。第1志望の「医者」の夢は、あっさり「建築家」へ変身した。ここで、第2志望の誕生である。私の年代に近い北大卒の建築家は以外に

こんな“志望者”が多かったと思う。

— 第2の夢もあっさり消える —

北大に入ったまでは良かったが、教養から学部への移行は教養時代の成績による。応募者が多かったこともあり、第2の夢はあっさり消え去った。

「さあ困った。どこの学部に行こう?」私はとっさに思いついたのが、小さい頃から山野を歩き回り自然が好きであった自然科学の世界。近郊の十五島公園(藤野沢)に家族付き合いのあるりんご園があり、小学校時代に良く遊びにいった。その家族に同年代の仲間がいて、豊平川の河岸で化石探し、やまめ(魚)を釣っては生態観察をしたり、蟬の孵化を夜中を通して観察した。“そうだ、科学者になろう!”

これが理学専攻の所以である。私の人生の大半は、こんな経緯で決まってしまった。

— 大学でロマンを教えられる —

大学では構造地質の世界的権威の一人であった湊正雄教授に師事した。「物事は、常にロマンチックに考えよ。地球の歴史のように」と教わった。プレートテクトニクス理論が一世を風靡しだしたのはこの頃である。太平洋プレートに乗ってハワイ諸島が日本にやってくる!!(図-1)、“本当かな?”と思いな

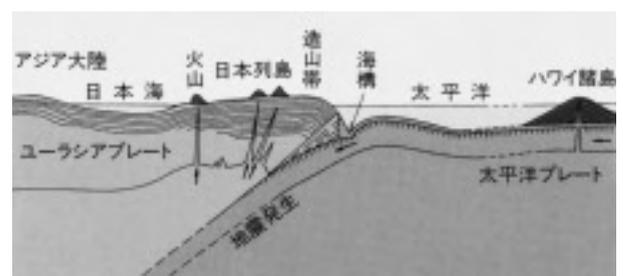


図-1 ハワイが日本にやってくる?

がらもロマンチックではある。

当時の教授は、自然保護活動で活躍された八木健三先生、日高造山運動の権威舟橋三男先生、どの先生方もロマンチックに講義をされていた。卒業論文は地球の歴史を紐解くべく構造地質がテーマとなる。

現場は、「北上夜曲」で知られる北上山地、ここは地球の歴史を探る鍵の宝庫と呼ばれていた。約半年間5人のメンバー(この内4人は技術士として活躍)が宿を同じくし共同研究に没頭した。5人は良く議論し喧嘩もした。しかし、酒を買ってきて飲むと直ぐ和気藹々となる。今もこんな状態が続いている。

— 地球の歴史が語る地球温暖化 —

構造地質学の基本は地球の歴史につながる。勿論、地球自身の温暖化については正規学問の1つである。地球の歴史は46億年と言われる。この間に想像を絶する出来事や環境の変化が訪れた。微惑星との衝突、マグマの噴出とマグマの海。幾度となく温暖期と寒冷期にみまわれ、生物種の絶滅が繰り返された。

子供達に人気のある恐竜が出現したのが2億8000万年前の温暖期が続いた時代。絶滅したのが6500万年前の寒冷期、絶滅原因の一つに巨大な隕石の衝突があったとも言われている。マグマが噴出し、黒煙とチリが吹き上げる暗黒の世界である。太陽光はさえぎられ、酸性雨が降り注ぎ、気温は低下し寒冷期となり恐竜は絶滅した。酷寒といわれた氷河時代では、平常時より4~14度ほど低かったと言われている。この温度で地表の面積の40%を10年間も氷らせてしまうのに十分な気温低下である。

地球自身も自然界で幾度も温暖化と寒冷化を繰り返してきた。過去100万年だけ見ても、約10万年周期で温暖期と寒冷期を繰り返してきた。図-2に示

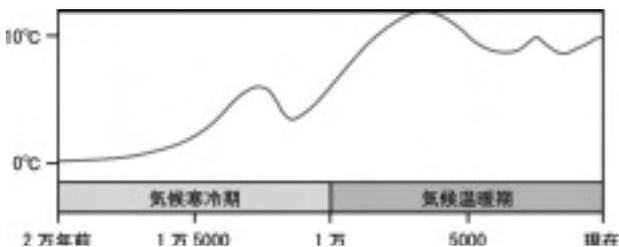


図-2 地球自身も温暖期の時代 (図はモデル)

すように2万年前(マンモスが絶滅した最終氷期)の気温を0°Cと仮定して現在と比較すると赤道付近では2°C、高緯度付近では約10°C上昇しているといわれる。

現在は気候温暖期に入り、世界各地の大陸氷床や山岳氷河の融解にも当然係っている。

これに加えてこの1世紀の間に世界の人口は15億から60億へと4倍に増大した。エネルギーの消費量は20倍、2酸化炭素の排出量は12倍、地球の温暖化が進むのは当然である。しかし地球の温暖化の一因に人間の急激な文明の発展が係っていることはIPCCによるデータ、京都議定書、世界的環境会議などで明らかである。

今地球温暖化を議論し、温暖化対策を考えているのは、この人為的原因で上昇した温暖化についてである。地球自身の温暖化(マクロ)と文明が係った人為的温暖化(ミクロ)を混同した論議が一部評論家やマスコミの間でされているのが気がかりである。

— いよいよ就職を考える —

大学4年になり、それぞれの行き先(就職先)が話題に上りだす。私は生まれ故郷の札幌が好きであり、札幌での就職希望を出していた。湊教授から声がかかった「大島君、挨拶に行くぞ」。連れられて行かれた所が、当時北4条西6丁目に在った北海道開発コンサルタント(現(株)ドーコン)である。対応してくれたのが佐々木敏雄元社長で、元支部長の佐々木さんとの初めての出会いであった。

若き技術者として

— コンサルタントへのスタート —

(株)ドーコンの設立は1960年(昭和35年)、地質部(当時は課)発足が1964年(昭和39年)、私の入社は1965年(昭和40年)である。当時の部員は開発局の元土木試験所の地質研究室、土質研究室、ドーコン内の各部署からの精鋭部隊で構成されていた。私は地質課新卒の第1号であった。

入社直後に橋梁課の一人が私のところにやってきて「おい、嫁さんは決まっているのか?」と声をか

けられた。それが前支部長の青木さんである。佐々木さんと青木さんとは、入社前後の僅かな時間に運命的な出会いをしたのである。

課の組織は大きく道路班とダム班そして土質班に分かれていた。私は道路班に配属となり、路線選定やトンネル、災害対応が主な業務となった。

#### — 陸の孤島は私の専門 —

当時の道内の道路事情はいわゆる「陸の孤島」あるいは「不通」といわれる箇所が多かった。

石狩～増毛を結ぶ231号、島牧～瀬棚を結ぶ229号、穂別（福山）～日高を結ぶ274号、浦河～大樹の236号、ウトロ～羅臼の334号（写真-2）など道路の無い所に多くの国道作りに携わった。



写真-2 羅臼岳をバックに

231号、229号など海岸線の仕事は地元でチャーターした磯船が大きな交通手段を担ってくれた。1年間の半分は山の中を歩き回り、マイカーとテントが生活必需品であった。そこはエゾシカ、ヒグマなど野生動物との共生の場でもあった。

#### — 技術士受験の動機 —

人が寄り付かないところを調査し、国道ルートの選定業務に意見を言う機会が増えだした。社内の打ち合わせならいざ知らず、開発局のベテラン監督官に入社数年の私の意見を信用してもらうには、せめて国家資格でも無いと話が進まない。

信用されるために“早く資格を取ろう!!”これが技術士試験のきっかけであった。なんとか1974年（昭和49年）に合格できた。

## 技術士会活動で人脈を

#### — 入会のすすめ —

1982年（昭和57年）に勤務先がドーコンから現在の会社へ移動した。そして、当時の技術士センターの活動に参加する。

1989年（平成元年）ある機会に北村技術士から「私達の会合で何か話しをして欲しい」と声をかけられ、何も知らずに即OKした。その会合は今の技術交流研究会であったが、その即答と同時に「話をしただくには日本技術士会会員でなくてはだめ」。

“ハイ”と応えて会員になるしかなかった。

#### — 技術士会活動で人脈を —

技術士会活動で得た一番の宝物は人脈である。その一つに1993年（平成5年）に設立された道路管理技術委員会がある。私も設立当初から係りをもったが、産・学・官からなる委員会で現在は約30名の技術士が委員として活躍している。

1993年（平成5年）から1997年（平成9年）にかけて釧路沖地震、北海道南西沖地震、北海道東方沖地震、豊浜トンネル岩盤崩落、第2白糸トンネル岩盤崩落など短期間に北海道を代表する災害が次々と発生した。北海道南西沖地震の刀掛トンネル直上の巨大岩石（25m×8m×10m）の転倒除去（写真-3、4）の計画に係ったが、経験に富んだゼネコンの技術者に負うところが大きであった。ハンドブックエン



写真-3 覆道直上の不安定巨大岩体



写真-4 巨大岩体の転倒発破

ジニアに近かったコンサルタント技術者にとってこれは大きな収穫となった。

豊浜トンネル岩盤崩落と翌年の第2白糸トンネルでは崩落直後から現場に泊り込みとなる。

新山技術士(当時開発局建設部長、局長)、熊谷技術士(当時小樽開建部長)、能登技術士(現副支部長)、佐藤技術士(現室建部長)、同委員会の三田地教授、三上教授、佐藤馨一教授(共に北大)、岸教授(室工大)の先生方と意見を交えたことは、大きな宝となっている。

— 人も企業も社会の一員 (CSR) —

私の社会人としての半分は学会、技術士会などの社会活動であった。これを認めてくれた会社の上司、経営者には深く感謝している。これらの活動は企業の業績には貢献しないし、私自身も「申し訳ない」という気持ちが強かった。親しい友人から「大島さんが社長になったら会社はつぶれるよ」と。私自身も全く同感であり、社長だけはなりたくなかった。

しかし、いつの間にか社会は変化して人も企業も同じ社会の一員となった。企業も利益の追求だけではなく、環境問題や安心・安全な社会の構築などに社会貢献をする時代へと広がってきた。まさに技術士会での活動も企業の社会貢献活動と評価されるようになってきている。皆さんも、ぜひ胸を張って活動を続けていただきたい。

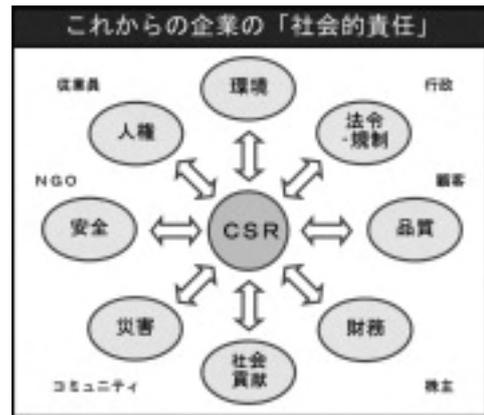


図-3 これからの企業の社会的責任

eco 検定試験でも「企業の社会的責任」(CSR)のあり方を強く教わった。地球環境時代にむけてぜひ皆様に受験をお勧めしたい。

技術士会への期待

— 21 部門の技術力をフル活用の時 —

「技術士ビジョン21」で「社会の利益と環境の保全に貢献する技術士」を打ち出した。国民の生活を守り、環境に配慮した持続可能な社会を推進していくことが技術士会の使命と考える。

昨年「あらたな北海道総合開発計画」が打ち出された。その中で「地球環境時代を先導し自然と共生する持続可能な社会の形成」について北海道がイニシアティブ(新たな試み)を取ろう、とある。

この意義は極めて大きい。この趣意は「道民がその先導的役割を果たそう!!」ということである。

この世界的な経済不況で見直しを余儀なくされたとはいえ、自然環境と共生した地域づくり、食料供給力の強化や都市圏への社会資本の重点整備など、この大枠は今後も進められよう。このどれもが私達21部門の技術士に係る重要な課題である。

「昨年の北海道洞爺湖サミット」も道民、国民にとって印象度が低い。温室効果削減に対する先進国と発展途上国の意見の食い違いにより、一時停滞しているものの、現在60億人の人口が2050年には90億人に増える。食料にしてもエネルギーにしても、「もう、いい加減にしてくれ!!」との地球の悲鳴が聞こえてきそう。

国民の安心・安全で豊かな社会をつくる技術士が優先的に取り組むべき一つに「持続可能は社会の推進」があると考えます。

— 北海道支部が技術士会活動の先導的役割を —

来年4月から公益法人に則って、支部も新たなスタートをきる。ぜひ技術士が社会に広く認知され、技術士活用の拡大を急ぎたい。

本部理事会、支部長会議などを通して全国の技術士活動を見守ってきたが、会員入会率の低さが気に

かかる。建設関連部門で技術士活用が進むものの、他の分野はまだまだである。技術士の活用促進には技術士会会員の組織率が大きな力となる。

このためには技術士会入会の魅力がなければならない。幸い当支部は全国的にみて、もっとも活動が進み会員組織率も高い魅力的な組織である。

4月から支部の新しい執行体制がスタートした。日本技術士会の先導的役割を祈念する。